

文化財センター通信

【かざぐるま】

風車

第 42 号

平成20年3月31日発行



紀州の歴史と文化の風

財団法人 和歌山県文化財センター

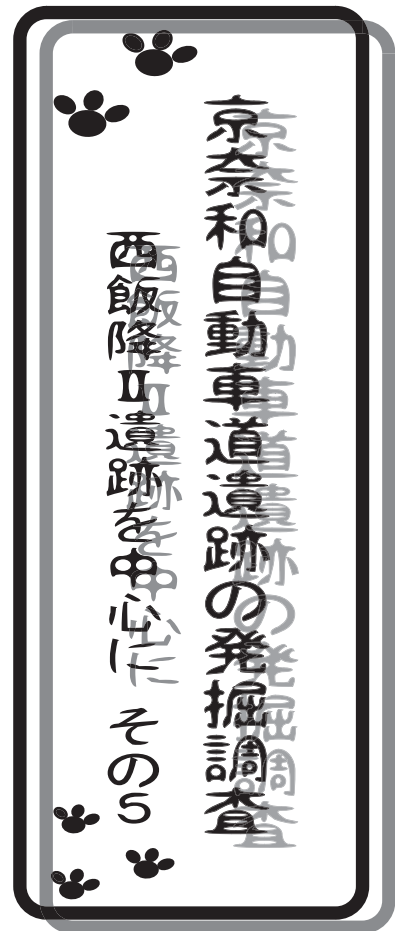
＊西飯降Ⅱ遺跡の調査概要＊

今年度の第2次調査は、6月から丁ノ町・妙寺遺跡（2次）において約17,200㎡、10月から西飯降Ⅱ遺跡（2次）において約6,600㎡、それぞれ調査をおこないました。今回は西飯降Ⅱ遺跡を中心に、調査成果を報告します。

かつらぎ町内における京奈和自動車道（紀北東道路）関係の遺跡発掘調査は、平成18年度から実施しており、和歌山県紀北地域では最大規模の発掘調査を行っています。昨年度の調査は約18,800㎡の面積で、弥生時代から古墳時代の集落跡、古代の水田跡などが検出され、また弥生時代の石剣や絵画土器、古墳時代の下駄など、県内でも例の少ない貴重な出土品がありました。

調査対象範囲は、東西約280m、南北約60mで、東西南方を西から順に1・2・3区とし、南北方向を西から4・5・6区と設定しました。1区では、西端で方形周溝墓と、流路や溝の痕跡が検出されました。中央付近では、弥生時代・古墳時代の竪穴住居や奈良時代の掘立柱建物群が複雑に重複していました。遺構群は、調査区の南北両側にも続きます。

西飯降Ⅱ遺跡は、紀ノ川北岸の、東側を弁天谷川、西側を畑谷池の谷筋に挟まれた南向きの緩斜面に立地しています。調査の結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代から中世に至る複合遺跡であることがわかりました。特に、弥生時代、古墳時代の竪穴住居が90棟以上、奈良時代の掘立柱建物が20棟以上検出されたことは特筆されます。



調査位置図 1:3,000

－第42号の主な内容－

1. 京奈和自動車道（紀北東道路）遺跡発掘調査 その5
－西飯降Ⅱ遺跡を中心に－
2. 【コラム考古学の散歩道17】
「シンポジウム 紀州の飛鳥－貴志川の古代文化を
考える－」に寄せて



1区掘立柱建物・竪穴住居群 北東から

2区は、1区の東に隣接し、弥生時代・古墳時代の竪穴住居と溝が検出されました。東端では縄文時代の遺構があり、流路などからも縄文土器が出土しました。

3区は、2区の30mほど東に位置します。弁天谷川への落ち込みを検出し、集落の東限を確認しました。4・5・6区は、1区の北に位置し、竪穴住居や掘立柱建物の密集が北に広がるのがわかりました。6区の北東部分に向けて、遺構の密度は減るようです。調査区の40mほど北には、丘陵裾が迫ります。

縄文時代後期

(約4500～3500年前)

縄文時代の遺構は、2区東端を中心に検出され、縄文時代後期の土器



1区001方形周溝墓土器出土状況 南から

棺墓2基、集石遺構2基があります。戦前に、30mほど北東に離れた弁天谷川の右岸で、縄文時代の石棒(祭祀の道具)が発見されたことからみても、調査区の北側あるいは東側に集落の中心がある可能性があります。
弥生時代中期～古墳時代前期
(約2000～1500年前)

弥生時代前期の遺物は確認できず、弥生時代中期になると、方形周溝墓や円形竪穴住居がつけられます。中央に炉を設ける円形竪穴住居は14棟確認できました。調査区の西端と東端をのぞく部分が、集落の中心部と考えられます。1区西端は墓域になっていったようです。2区東端では、溝が2条あり、これが集落の東限であった可能性があります。

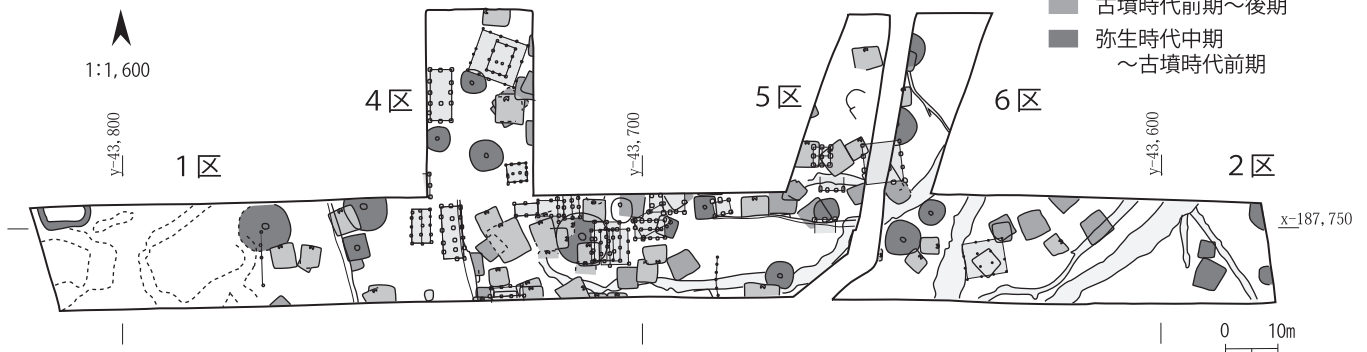


1区3875竪穴住居カマド 製塩土器出土状況 西から

弥生時代終末期～古墳時代前期には、方形竪穴住居が多数あります。この時期の住居は調査区全域に分布し、さらに東側に広がる可能性があります。
古墳時代中期～後期
(約1600～1400年前)

古墳時代中期から後期にかけて、造り付けのカマドをもつ方形竪穴住居が約40棟みつけられました。調査区外にかかるなど、部分的なものも含めると合計60棟以上になります。カマドは、砂岩製の川原石を用いた支脚が残るものも多くあります。この時期の住居は調査区の西端と東端をのぞく中央部分に分布し、2区中央で検出された溝が、集落の東限の可能性がありそうです。調査区西端には、自然の流路あるいは溝が流れ込んで

2007京奈和自動車道第2次発掘調査
西飯降II遺跡の調査





2区1300・1301竪穴住居 北から



4区3017掘立柱建物 南東から



5区4011掘立柱建物・3100竪穴住居 西から



調査区周辺航空写真 南から

おり、ここが集落のある微高地の縁辺と考えられます。出土遺物から、集落は5世紀後半から6世紀後半にかけて存続し、最盛期は6世紀後半と考えられます。また竪穴住居内からの製塩土器の出土が目立つことが特徴的です。

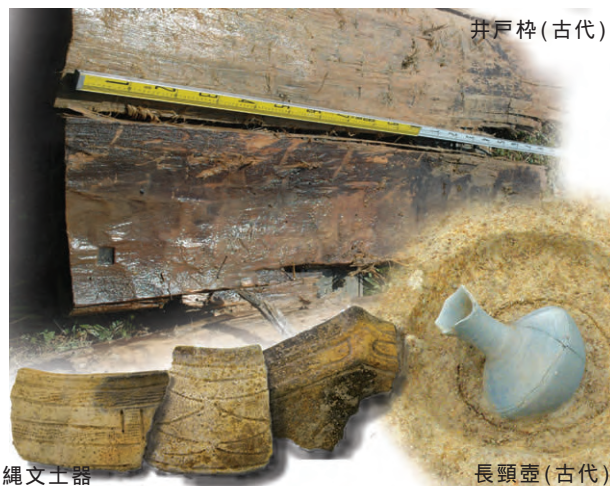
＊奈良時代＊
(約1300～1200年前)

1区中央から北側の4・5・6区にかけて、奈良時代と考えられる掘立柱建物20棟余りと、柵、井戸が検出されました。建物は正方位をとるものが多く、同じ場所に、ほぼ同規模の建物を建て替えるものもあります。また、1区の東と西に、約54m間隔で南北方向の柱列があり、建物群を区画する柵の可能性があり

ます。また1区中央南端で、井戸1基が検出されました。掘形は隅丸方形に近い円形です。上半は素掘り状態で、下半には縦板材を組んだ井戸側がありました。井戸は礫層を掘り込んで構築され、約4・5m下まで掘り込んでいます。井戸側の板材は5～6枚あり、それぞれ長さ約2m、幅約30cm、厚さ約7cmで、断面形は円弧状に丸みを帯びています。表裏とも丁寧に整形した痕跡が残っており、これらを円形に組合わせて井戸側としていました。出土遺物は、土師器、須恵器片が多数点あるのみで、期待された木簡や木製品は出土しませんでしたが、その規模・構造から一般的な集落とは性格が異なることがうかがえます。

遺跡の南約100mには「大道上」「大道下」の小字名が残り、古代の南海道が紀ノ川と並行して東西に走っていたと推定されています。今回発見された8世紀の掘立柱建物群は、その規模などから官衙的な施設、あるいは地方有力者の居館であった可能性があります。また西に隣接する昨年度の調査では、条里型地割が、9世紀までさかのぼる可能性が指摘されました。今年度の丁ノ町・妙寺遺跡でも、同時期の掘立柱建物群が検出されています。これらの成果から、調査区周辺における古代の景観が復原されつつあります。

(富永 里菜)



井戸枠(古代)

縄文土器

長頸壺(古代)

「シンポジウム紀州の飛鳥

—貴志川の古代文化を考える—」

に寄せて

vol.1

去る12月1日(土)午前中、「歩いて知るきのくに歴史探訪—貴志川の古墳をめぐる—」が開催され、好天に恵まれ平池古墳群、双子三味塚、罐子塚など貴志川の河岸段丘上に点在する古墳をめぐりました。午後からは、紀の川市との共催で「シンポジウム紀州の飛鳥—貴志川の古代文化を考える—」が開催されました。

この「紀州の飛鳥」との呼び名は、戦後、紀ノ川流域を精力的に調査された故金谷克己氏が岸宮祭祀遺跡を調査された際に眼下に広がる貴志川を見て命名されたものだそうです。

シンポジウムでは、菌田香融氏の「古代那賀郡の仏教遺跡」の基調講演のほか、岩鶴敏治氏の「貴志川の後期から終末期古墳」、立岡和人氏の「北山廃寺の発掘調査」そして、私の「那賀郡の古代寺院」でした。私の発表の骨子は、那賀郡に建立された白鳳寺院は西国分廃寺、最上廃寺、北山廃寺の3箇寺であること。葺かれた瓦がいずれも坂田寺系であること。3廃寺とも塔跡しか確認できないことなどから四天王寺式の伽藍配置を想定している話をしました。

発表後、多くの質問をいただきました。お答えする時間が足りず、このコラムを借りてシリーズでお答えしていきたいと思っています。質問内容については私なりの見解で整理しています。

Q 瓦の文様で、私寺、官寺がありますか。

氏寺、官寺の区別は正確にはわかりません。ただし、法隆寺式の瓦が西国の分布圏があり、法隆寺の庄倉経営とい

う事情があつたといわれています。川原寺の瓦は、壬申の乱において、天武側に味方した豪族の分布と重なるとの考え方があります。官寺の造営にはこのような政治的な動向が大きく働いたと考えられています。

紀伊で官寺と考えられるのは、畿内の南限、伊都郡に建立された川原寺系の瓦を創建瓦に持つ佐野廃寺と、那賀郡に建立された本薬師寺式を創建瓦に持つ西国分廃寺で、他の寺院は氏寺であつたと考えています。

ただし、大和の古代寺院との深いつながりの中で、紀伊の多くの寺院が建立されていったことは間違いないと思います。(富加見 泰彦)



風車 第42号

平成20年3月31日 発行
(財)和歌山県文化財センター
〒640-8404

和歌山市湊571-1
Tel : 073 (433) 3843
Fax : 073 (425) 4595

e-mail : maizou-1@wabunse.or.jp
URL http://www.wabunse.or.jp

